自然のなかにみる社会関係

―滋賀県西浅井町の一農村の事例―

関西学院大学大学院　藤村美穂

環境問題にたいする関心が高まるとともに、日本の伝統的なむら社会が、そこにおける環境管理という側面から注目されるようになった。というのも、「むら」は、周囲の自然を最大限に利用しながらも、生態系を決定的に破壊することなく長年にわたってそれを維持し、保ってきたからである。このようなことは、自分たちの生活を維持するために「むら」が蓄積してきた知恵や技術の結果であるということができるだろう。

しかし、その一方で、実際に「むら」に生きる人々は必ずしも意図的に自然を守ってきたわけではないのである。地理的・経済的などの条件によっては、開発などのかたちで自然を破壊してきた地域も少なくない。また、本報告の事例地のように、個人的な利益や意志にかかわらず、今でも伝統的な土地利用が続けられている地域も多く存在する。これらのことからは、「むら」には自分たちの周囲の土地や自然と関わる何らかの様式が存在し、その結果として、とくに後者のような場合は「むら」が環境管理の主体として見えてくるのだと考えることができる。

本報告の課題は、現在でも周囲の生態系と調和した生活を維持している農村の事例をとりあげ、そこで人々がどのように自然とかかわってきたかを明らかにすることである。ここでは、とくに周囲の物質的な自然とのかかわりについて、所有という社会現象を手がかりに考察をすすめている。ただし、これは、所有論の見地から（克服したり保存すべき）共同体としての「むら」を追及することではないし、所有にあらわれた権力構造を追及することでもない。人と自然のかかわりの社会的な表現のひとつとして所有をとらえ、現存する「むら」の生活のなかで人々がどのように自然と結び付いてきたのかを考察する手がかりにしている。

また、具体的な生活においては、人と自然との結びつきは、人と自然との関係のなかだけに独立して現れるものではない。所有という現象が関係論として論じられることが可能であるように、それは、人と人との結びつきにもあらわれてくるものなのである。報告では、人と人との結びつきという側面ともかかわらせながら、人と自然との結びつきを可能にする社会条件として、人々が互いを見る視線やむらびととしての存在のあり方などを考察してゆく。そして、それをとおして、事例村において自然がどのようなものとして（社会的に）経験されているかをあきらかにしてゆきたい。